

エコクリティシズムから見る

D. H. ロレンス*

——“spirit of place” “sense of place” をキーワードに——

D. H. Lawrence's Literature Viewed from Ecocriticism

——“spirit of place” “sense of place” as its key-word——

北 崎 契 縁

は じ め に

上記題目は、2000年6月18日に同志社大学で行われた日本ロレンス協会第31回大会のシンポジウムⅡ「エコクリティシズムからみる D. H. ロレンス」というテーマのもとに口頭発表の機会を得たものである。なぜまたその内容を論として起こすことになったのかという点については、直接間接的に様々な事情があるが、ここ数十年来筆者の脳裏にいつもあったのは、人間の心のありようであった。そんな思いを抱いていた今夏、次のような興味深い書物との出会いがあった。

その書物というのは、吉本隆明氏による『心とは何か』¹⁾という実に刺激的な内容のものであった。「母の物語」を基本に据え、また「心」が「臓器の物語」としても生きられていることを語った内容のこの書の中に、エコロジーに関わる言及が一つあった。第一部の最後に掲載されている「言葉以前の心」の3にある。フォレスト・カーターというアメリカインディアン出身の作家が書いた『リトル・トゥリー』²⁾という小説である。「これは、ほくが、今年読んだ小説ではピカーの小説で、ちょっとお

*大会の報告は、『D. H. ロレンス研究 第11号』（日本ロレンス協会、2001年3月）中、「日本ロレンス協会会報31」の「【公開シンポジウム】エコクリティシズムからみる D. H. ロレンス」に掲載されている。pp. 87-89 参照。

勧めします」と切り出して、小説に描かれた世界を吉本は紹介している。「この人はインディアン出身なんですけど、父親と母親が亡くなって、山住まいをしているインディアンの祖父と祖母に預けられます。中略。そして毎日のように、おじいさんの後をくつついて、木の実を探したり、山の畑を耕したり、それから鳥や獣を時々捕ったりして、暮らしています。そういう世界です。」

この小説のすごいところは、例えば、「今、風がこういうふうに吹いて、木がこういうふうに鳴っていると、それは、木がこういうことを云おうとしているし、小鳥が鳴いていると、あの鳴き方は、何を言っているのか、こういうことをいいたくて鳴いているんだよ」と、祖父は孫に教える。ところが、「われわれ」や「エコロジスト」が云うと、みんな「比喩」になってしまうというのである。インディアンには、

「言葉っていうのは意味じゃないぞ」つまり「意味として受けとっては駄目だぞ」と教えるわけです。意味として受けとると、みんなわからなくなっちゃう。木が今何を云ったのかということのも、鳥が今何を云っているのかということのも、全部わからなくなっちゃう。³⁾

と、指摘した直後に吉本氏は、「それは比喩として教えるんじゃないで、本当にそうおもって、そう教える。そういうふうにはちゃんと聞こえる。そういう世界を、じぶんの体験ですから、内在的に見事な世界として描いています」と、インディアンの言語感に感動している様子を興奮気味に伝えている。

この後、この子が幼年期を脱して学童期には入り、白人の教育を受ける段になるといろいろと問題が起こり、結局この子は学校を辞めることになる。この辺りはまさにロレンスがすでにアメリカインディアンに関わった様々なエッセイで指摘していたこととぴったりと重なるのである。ロレンスは、『リトル・トゥリー』という小説に描かれた世界観をすでに先取りしていたというのが筆者の考え方である。

今日、幼児虐待とか弱者虐待などが喧しく叫ばれている。人間の心の間

題が著しく脚光を浴びているのが現在である。なぜそのような事態が出来ることとなったのか。“spirit of place” “sense of place” というキーワードを手かがりに、ロレンス文学にその解決の糸口が見つかるのではないかという期待を込めたところに、もう一度、改めてシンポジウムの内容を再考し書き直したいという気持ちが生まれてきたのである。

※

The Ecocriticism reader の “Introduction” XXV 1. Ecotheory: Reflective on Nature and Culture^③に三つの論文が掲載されている。^④その中の一編である N. Everden の “Beyond Ecology: Self, Place and the Pathetic Fallacy” という論文が筆者の興味を惹いた。この論文の骨子は次の2点に整理されている。①エコロジーの発見や細胞生物学は我々の自己概念に変革をもたらした。個人などというものは存在しない。存在するのは ‘an individual-in-context’ あるいは ‘self-in-place’ であるということ。②文学もメタファーを通して自己と場との関係を感じさせるものであるはず、ということ。以上の2点に集約されるが、もう少しこの論文の中身をのぞいてみよう。

「西洋人の精神にとっては、相互関係性 (inter-relatedness) とは因果関係性 (a causal connectedness) (前後関係) を意味している。」^⑤つまり、あるものの中で、ある変化が生じれば、その変化は他のものに必ず影響を及ぼすという形で相互関係にあるというのである。だからすべてのものが相互関係にあるということは、次のようなことを示している。つまりもし我々が資源を開発しようとするれば、相互作用 (影響) を中和する技術的な手段を発見しなければならないことになる。例えば、汚染の解決には「希釈」(dilution) つまり、溶液に水などを加えて薄めればよいと (洗い流せばよい) ということになる。要するに、ある原因があって、こういう結果が出ているのだから、その「原因」となったものだけを除去すれば万事オッケイという姿勢である。しかし実際に問題となっているのは、生態系の様々な部分が紛れもなく混ざり合っている (intermingling) というところ

にある。つまり一つとして関連のない全体というものは存在し得ないのである。例えば皮膚の表皮は、生態学的に言うと、堅い殻のようなものではなく、微妙に相互浸透している池の水面あるいは森林の土壤に似ている、というのである。

生態系の様々な部分の混ざり合いという観点から先の **Evernden** はさらに次のように議論を進めていく。

生態系の様々な部分の混ざり合いという観点から見ると、例えば「細胞」を持ったものは何でもその細胞に属していると考えるのが科学的な考え方であった。しかし植物細胞内にある「葉緑体」が実は細胞の他の部分とは全く別個に行動していることが分かってきた、と言う。例えば「藻と菌【真菌つまりカビ】」の関係について、元々は独立した有機体であった可能性がある。換言すれば、一個の有機体はたった一組の遺伝子によって操作されているのが当たり前だとされてきたが、と同時に驚くべきことには、事実は遙かに独立しながら一種の「共生／相利関係」にあると考えるのが正しい。つまり、二つないしはそれ以上の有機体の運命は信じられないくらいに「絡み合っている【intertwined】」ので、分離不可能なのである。

生態系の様々な混ざり合い・絡まり合いという観点はさらに「物質的対象物と人間」との関係についても適用される。また肉体的要因との同一化を目指す「風景美学」、それとの関連で「子供と自然界との関係」あるいは「環境の中の個人」にまで議論が展開していく。そして特に特定の「場所」に対する強い親和性【「縄張りのな習性・意識」】について **Everden** は、シクリッド【**cichlid**】という観賞用の淡水魚の生態を紹介している。普段は体の大きなシクリッドが自分の思い通りに振る舞っている。しかし繁殖期がやってくると奇妙なことが起こる。つまり体の小さい方が一度ある「縄張り内」で自分の居場所を確定すると、その魚は狂ったようになり、時には自分よりも体調の大きな魚を攻撃することすらあるという。この魚は「皮膚」によって制限された一つの有機体を越えて、いわば想像的な皮膚によって境界に接する「有機体プラス環境」という生き物になってしまうのである。こうしてこの魚はみずからの「個」を明確に主張しながら

ら、同時に「環境」とも一体になり得ているのである。⁶⁾

ところがデカルト以来の西洋人は「我々はある環境の一部分ではないというだけでなく、ある肉体の一部分ですらないというような捉え方をしてきたのである」⁷⁾と著者は指摘している。そして「本当の」私たちは物質世界から分離した肉体の奥まったところ、つまり貴重な「繭の中」に濃縮されている。縄張り争いをする魚が環境の中にみずらの「個・自己」を拡大していった環境と一体化するのとはちょうど逆に、出きる限りしっかりみずからの「エゴ」を蓄積しようとするのである。【これは **homocentrism** の典型】

このような人間にとっては、この世界は単に使用可能な「資源」としか映らない。そうして全世界は単なる「飼い葉桶」か、さもなくば「排泄物」と化してしまう。このような西洋人に典型的な人間と対照をなすのが「ある環境の中に帰属し、必然的にその一部であるということを知っている」人である。ここから著者は「旅行者」と「住人」との違いに注目する。「ある環境に帰属し、必然的にその一部であるということを知っている生物・人が」「審美的なもの」つまり「芸術」の目的に叶った生き方をしており、今日の **ecocentrism** の生き方にも繋がっていくことを暗示している。⁸⁾

以上のような **Everden** の説をふまえた上で、ここに一つの疑問を提示したい。土地に対する帰属意識が芸術の目的に叶うとすれば、ロレンスのような世界中を放浪した人物になぜ「その土地の住人であるかのような発言・主張」ができたのであろうか。特に第一次大戦以降イタリア、セイロン、オーストラリアそして北アメリカへと巡礼の旅を続けて一カ所に定住しなかったロレンスに、とてもある土地への帰属意識があったとは考えられないからである。その理由は逆説的ではあるが、彼には訪れた土地を客観的に眺めることができる異郷者であったからこそ出来たのではないか。もちろんそのためには天性の「土地に対する感覚」つまり“**spirit of place**” “**sense of place**” が具わっていたからであると捉えたい。ともあれロレンスの「場所・土地」に対する感覚はエコクリティシズムの鍵言葉である「場所性」の概念を彷彿とさせる。例えば『緑の文学批評』に次の

ような指摘がある。

ネイチャーライティングは自分の生きる場所の感覚を求め、自己のアイデンティティを抽象的な哲学的思考や家族などの人間関係に先んじる「住んでいる場所」との関係で樹立する。……この感覚には……人間が土地を所有するのではなく人間はある土地に帰属する方がよいとの提言が含まれているとともに、次々と他者の土地を奪っていったり失っていった国全体の罪と喪失の記憶が内包されている。⁹⁾

中でも「次々と他者の土地を奪っていったり失っていった国全体の罪と喪失の記憶が内包されている。」から想起されるのは、すでに1922年12月24日に書かれた「あるアメリカ人と一人のイギリス人」というエッセイの中でロレンスが批判している「バーサム法案」を巡る議論である。

ところでプエブロ村落の幾つかの土地は、悲しいことには疑いもなく不法侵入によってすっかり略奪されてしまっている。しかし私は悲しんだままでいたくはない。タオスは悲しんではない。私はタオスの側に与したい。誰の目にも明白なことは、こういったインディアン土地や払い下げ地に対して何らかの行動がとられるべきであったということだ。ニュー・メキシコ州がその動きを見せた。バーサム上院議員は黒衣の騎士である。彼はこの四平方リーグの土地の問題に飛びついた。彼が提出した有名なバーサム法案は上院を通過し、今月【12月】にはおそらく下院で審議されるだろう。

この法案の中身は、プエブロインディアンや白人の支持者には完全な挫折感を与えるだろう。この法案は、言ってみれば手に入るものは何でも取ってしまう、西部開拓者のようなものである。……¹⁰⁾

ここでは「土地、あるいは土地倫理」を主張するエコクリティシズムの主張をロレンスが先取りしていたことを強調したい。「西部開拓者」と名指しで批判している点などは、奴隷解放に直結する平等の倫理思想の伝統を

持つアメリカ人に対して向けられたものだけに、当のアメリカ人にとっては実に痛いところをつかれたと映ったに違いない。しかしロレンスは単に倫理的な批判だけに満足しているのではない。むしろその姿勢には「感傷的虚位」【the pathetic fallacy】に陥ることなく、インディアンの実態、彼らが引き継いできた「文化」の核が失われることを警告しているのである。

こういった遣り方がプエブロインディアンを分散させることになるのは目に見えている。不法入居者や土地問題に利害関係を持ったメキシコ人は、……十年もすればプエブロインディアンは破滅してしまうだろうと公言して憚らない。……そのころにはインディアンは白人のアメリカ社会に吸収されてしまっているだろう。その結果プエブロインディアンは様々な州に日雇い労働者として散在し、みずからの文化的な核を失ってしまうだろう。インディアンを白人に変えようという大なる野望は可能な限り実現されるだろう。彼らはみんな賃金労働者になるだろうが、もうたくさんだ。後は文化の喪失と英知の破壊があるだけだ。¹¹⁾

「文化の喪失と英知の破壊」を警告し、政治の魔手からインディアンを守ってほしいと訴えるロレンスは、攻撃の手が同じ白人種ということで少し遠慮気味ながら、以下のように意表をついた形でインディアンの存在を捉えている。

というのは結局のところ、奇妙に聞こえるかも知れないが、プエブロインディアンは依然としてアメリカの生命の中心である当地にしっかりと根を張っているからである。今でも真にアメリカ人と呼べるのは、馴染み薄い見方かも知れないがインディアンであるからだ。白人をいくらごた混ぜに集めたところで、そんなものは国家とはいえないし、ましてや国民とすら言えないのだ。¹²⁾

「アメリカの生命の中心である当地にしっかりと根を張っている」から想起されるのは 1920 年 12 月 15 日に書かれた「アメリカよ、汝自身の声に耳を傾けよ」という短いながら、ずばりとアメリカの弱点をついた見事なエッセイである。このエッセイには、ヨーロッパに肩を持つ「一ヨーロッパ人」としてのロレンスではなく、ヨーロッパとアメリカを比較したとき何が真に問題なのかを見極めようとする予言者的とも言えるロレンスが存在する。「アメリカには伝統がない。文化の歴史というものが全然ない。……ヨーロッパはいつもこのような手前勝手な結論を下している」¹³⁾と、ヨーロッパに対して批判の刃を向けながらも、同じその刃を今度はアメリカにも向けるのである。「アメリカは自分が本当は豊であるのに、そのことが分かってないのだ」と。

以下このような姿勢で、このエッセイはイタリアとアメリカ大陸との比較が具体的な例を引きながらされていく。そしていよいよ結論近くなると、アメリカ人が未来に備えた支えを得るにはヨーロッパの過去の遺物からではなく、「今一度振り返って、そのくらい原初の大陸が持っている霊を捉えなくてはならない」と主張される。ここで我々が注意をしなくてはならないのは「暗い原初の大陸が持っている霊」¹⁴⁾（*the spirit of her own dark, aboriginal continent*）という表現である。

筆者は今まで“*spirit of place*”と“*sense of place*”をむそれほど区別せずに使ってきたが、両者は全く同一の概念でないことは明白である。両者の特徴を一言で言えば、前者が「地霊」と訳されているようにいかにも「霊的なあるもの、ある特定の場所に引き付けられるという意味で磁場的な力」を持った形而上学的な概念であり、後者は「場所の感覚」という言葉通り、あくまでも「人間あるいは生き物である自分が住む場所である、あるいは場所ではないといった感覚」という日常的な意味を指しているように思われる。*The Symbolic Meaning* の第 1 章「地の霊」の中でロレンスはいわゆる *Pilgrim Fathers* がアメリカに渡ったのは、「ちょうど渡り鳥の移動に似て、アメリカという未知の大陸の“*spirit of place*”の不思議な力に引き付けられたためであった」¹⁵⁾という趣旨のことを書いている。そうして「新」大陸に渡ったヨーロッパ人は、500 年近くを当地で過

ごし、漸く“sense of place”を獲得してきたのである。しかしロレンスに言わせると、「場所の感覚」は得たようであるが、本当にアメリカ人はアメリカ大陸に「根付いた」生き方をしていないことになる。再び「アメリカよ、汝自身の声に耳を傾けよ」に戻ってみよう。

アメリカ人は、アメリカインディアン、アズテック族、マヤ人、インカ人たちが残していった生命を拾い上げねばならない。不可思議なアメリカインディアンが手放した生命の糸を、アメリカ人は拾い上げねばならない。アメリカ人はコルステヤコロンブスが殺してしまった生命の鼓動を取り戻す必要がある。というのは、本当の意味で繋がりのあるのは、ヨーロッパと新興の合衆国との間にではなく、殺害されたインディアンの住んでいたアメリカと、騒ぎ沸き立っている白人のアメリカ人との間にこそあるからだ。……我々は聖フランチェスコや聖ベルナルドゥスからではなくモンテスマから出発しなければならない。¹⁶⁾

「本当にアメリカ人はアメリカ大陸に根付いた生き方をしていない」というロレンスの指摘は、アメリカ大陸にあってヨーロッパを眺めた別のエッセイ「またお会いしましょう、合衆国」でさらに先鋭化された形で出ている。僅か3頁にしか満たない短いエッセイながら、ここにはロレンスの言う“spirit of place”が具体的で明確な形で表現されており、実に印象的な内容となっている。プルマンという寝台車に乗り、リオ・グランデ河を越えてメキシコに入ったロレンスは、メキシコとアメリカの相違を「合衆国よ、お前は神経を尖らせるが、メキシコは感情を高ぶらせるのだ」とさりげなく表現する。なぜこのような相違が生まれてくるのかその理由はよく分からないが「まさに地霊のなせる業なのだ」と地霊にその原因を見ようとしている。そうしてメキシコの特徴を地霊的な角度から分析し、やがてピラミッドと白人の建てた「教会」という建物同士と比較に移る。

したがって偉大な白人の観念の外皮は、この地中に半インチも入り

込んではない。スペイン人の建てた教会や宮殿は、今にも倒れんばかりにぐらついて、危なっかしいこと極まりもない。……大地そのものの中から小山のようにそびえ立つピラミッドがいかにも土着のもののように見えるに反して、柱状のサボテンやコショウボクの木々が立ち並ぶ間にスペイン人の建てたロココ様式の教会は、いかにも倒れんばかりで、一時的なものにしか見えない。……17)

これは“sense of place”は得ても“spirit of place”が未だに了解できない白人に対する痛烈な批判である。ここで「建築」に対するロレンスの直感的とも言える意見と、その信憑性について少し考察しておきたい。そのために最近の建築学の成果を日本の建築学者の説を借りて跡付をしてみたい。

建築学が専門の鈴木博之氏は、その著書『日本のく地霊』で注目すべき説を展開している。氏は「地霊 (ゲニウス・ロキ)」とは建築を再び土地に着地させるまなざしであり、このまなざしが建築を創作する立場と教授する立場とを架橋するものとなるのである」と指摘し、「場所」の持つ重要性を喚起している。例として広島「原爆ドームを望む構造」の章の中、氏の、特に HP シェルの構造に対する問いかけを見てみよう。

広島平和記念公園の中心に建つ建物は、ピロティの上に載った平和記念資料館であるが、公園計画全体の中心はこの建物ではない。……この広場のさらに北側には平和記念公園の本当の中心である「原爆記念碑」が建っている。これは HP シェルという数学的な曲面でできている。HP シェルとは放物双曲線という曲面だ。放物線を双曲線に沿って移動させたときに出来るカーヴである。これは数学的に解析可能な曲面だったので、戦後の体育館やホールの屋根にしばしば用いられた。

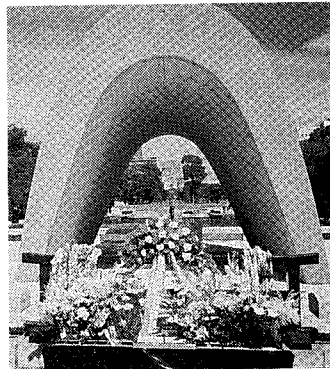
しかし、広島の慰霊碑が HP シェルの形をしていることは、戦後の時代を感じさせるものであるが、考えてみればこうしたかたちの碑というのも変なものである。……広島の慰霊碑は屋根に使うような形

を採用しているから、中空のトンネル型をしている。向こう側が抜けているような記念碑は、あまり例がない。これは意図的に選んだとしか考えられない形態なのだ。¹⁸⁾

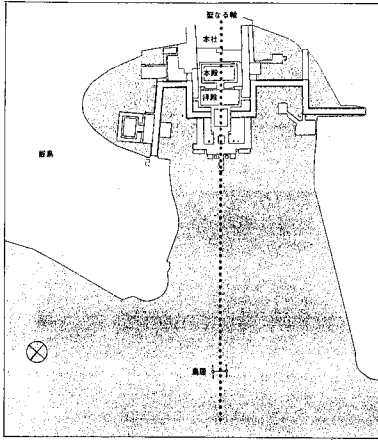
「これは意図的に選んだとしか考えられない形態なのだ」と鈴木氏は答え、その理由は HP シェルの形をした「慰霊碑」に人々が跪くことにより、トンネル型をした慰霊碑を通してその先に建っている「原爆ドーム」の姿を見ているのであると理由づけている。つまり、慰霊碑はそれを透かして原爆ドームを見据えるための装置である、と実に興味深い指摘が続く。さらに氏は丹下健三が作り上げたこのような建築は、実はすでにその原型が同じ広島に存在すると言う。それは厳島神社の境内地を想起させるからである。現在の我々はこの神社の鳥居を通して海を眺めるようになっているが、本来は、舟に乗って沖合から参詣したのである。つまり沖合の舟から鳥居を通して本殿を拝むという形が本来の参詣の仕方であったと言う。その理由は、もともとこの厳島神社は、「厳島」という島の主峰である弥山のすがたに古代の人々が神霊を感じ、それを畏敬の念をもって祀ったのがその起源ではないかと言われている。島は神聖な聖地であり、人々はそこに舟で海上から詣でたからである。

厳島神社配置図と、広島ピースセンター配置図を見れば¹⁹⁾、明らかに前者の構成が後者の計画に反映していることは鈴木氏の指摘の通り、誰が見ても明らかである。

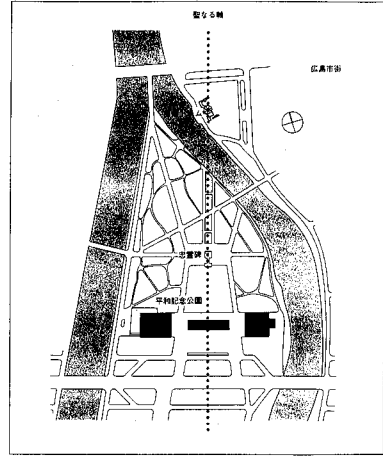
さらに鈴木氏は、原爆ドームから HP シェル型の慰霊碑を経て、平和記念資料館のピロティの間を貫いて延びる軸線は、厳島神社の弥山から本殿を経て海中の鳥居に至る一本の軸線と全く同じ性格を秘めているからである、と指摘している。こうして丹下健三が作り上げた広島ピースセンターという建物は実は日本の建築の伝統にしっかり



HP シェル型の慰霊碑¹⁸⁾



広島神社、配置図 鳥居を基点に聖なる軸が中心を貫いている



広島平和記念公園、配置図 原爆ドームと忠霊碑を結ぶ聖なる軸が中心を貫いている¹⁹⁾

りと根を張っているのである。それを一言で言えば「場所性の表現」となる。建築物が構想される場合、その建物が建てられる場所の性格と可能性、つまり「地霊」を取り込んでいくことがいかに大切であるかということをも丹下は知っていたのである。特別な意味を持つ場所を建築群によって作り上げるのが日本建築の深い伝統である。というのはそれは民族の古層に根ざした原理とも言えるからである、と鈴木氏は広島ピースセンターについての整理を終えている。

このように見てくると、近代建築と古代建築との見事な合体の例である広島ドームとその特異な建築は、実に深い意味を担っていたことが分かるのである。

このような地霊と建築との関係に対する解釈は、最近のエコクリティシズムの立場からの指摘とも繋がっている。*The Journal of D. H. Lawrence Society* に “D. H. Lawrence’s ‘Spirit of Place’ As Eco-Monism” (1991) というタイトルで書かれ、3年後に *Breaking Through to the Other Side* (1994) に再録された Donald Gutierrez の論文は「地霊」について生態学的一元論という立場で、次のように記述されている。「地霊とはある地

域のエトスを鋭く隠喩的に形成することを示している。換言すると、実際の地形・地勢と一体化していると見なされるもっとも強力な、人間的・歴史的な様々な特質を形成することである。]²⁰⁾古代から引き継いできた厳島神社の建築様式も同じように、単なる建築にとどまらず、この地の「地霊」そのままに人間の歴史など様々な要素と一体化した建物なのである。したがって主体はあくまでも「地霊」そのものであり、地霊が厳島神社を建て、そのようなダイナミックな自然の営みに呼応できる能力の持ち主であった丹下がこの地の「地霊」にいわば導かれるようにして建てたのが、広島ピースセンターであったのだ。

この辺りで再びロレンスのアメリカ批判に戻ってみよう。プルマン列車に乗ってメキシコに入ったロレンスは、*Mornings in Mexico* (1927) という有名なエッセイの中で随所に白人批判を行っている。しかし、その一方でインディアンに対する批判の目も同時に見られるので、なぜそのような批判が出てくるのかという点についても次に見てみたい。(この辺りになると、ロレンスの心は、白人批判に向けられつつも、新大陸よりも旧大陸つまり、ヨーロッパに徐々に向かっていることが明白となる。)

Now the white man is sort of extraordinary white monkey that, by cunning, has learnt lots of semi-magical secrets of the universe, and made himself boss of the show. . . .²¹⁾

The Aztec gods and goddesses are, as far as we have known anything about them, an unlovely and unlovable lot. In their myths there is no grace or charm, no poetry. Only this perpetual grudge, grudge, grudging, one god grudging another, the gods grudging men their existence, and men grudging the animals. The goddess of love is a goddess of dirt and prostitution, a dirt-eater, a horror, without a touch of tenderness. . . .²²⁾

白人を一種特別な「白い猿」に喩えて白人批判をしているかと思えば、一

方では、アズテックの神々が「可愛げもなく」、またその神話自体にも、「優雅さとか魅力とか詩というものが存在しない」とアズテック族の神や女神を貶すことで、白人批判の矛先を少しずつ弱めていく。メキシコを舞台にした小説『羽鱗の蛇』の最終章の最後に見られるケイトの「逡巡」の意味も、次のような記述を読めば一目瞭然となる。

She wiped her face, suddenly calm. Then she looked with wet eyes at Cipriano. He was standing erect and alert, like a little fighting male, and his eyes glowed back and uncannily as he met her wet, limpid glance.

Yes, she was a bit afraid of him too, with his inhuman black eyes. "You don't want me to go, do you?" she pleaded. . . .²³⁾

小説のコンテクストの中ではケイトは夫の国であるメキシコにとどまるようにも読めるが、ロレンス自身の立場からすると、そうはならないのでは、という予感が読者にはどうしてもよぎるのである。というのは先のエッセイ *Mornings in Mexico* の中でロレンスは次のように明言しているからである。

インディアンを意識の持ち方は、我々とは違う。それは私たちの意識の持ち方に対しは致命的なものだ。また逆に我々の意識の持ち方はインディアンのはとは違い、彼らにとっては致命的となる。この二つの道、二つの流れが合致することは決してあり得ない。それは和解することすら不可能である。そこには橋もなければ、二つを結びつける運河のようなものもない。

出来るだけのことを早く理解して受け入れる方がいい。そして度の過ぎたセンチメンタリズムから、インディアンを我々の言葉で考えようなどと企てたりするのは止める方がいい。²⁴⁾

この辺りのインディアンに対する批判は、逆に、いかに白人が人間中心

主義の弊害に陥っているかという事態をロレンスは諫めているのである。こういったロレンスの慎重とも言える態度は、このエッセイが初めてではない。アメリカインディアンの世界や生活に深い共感を覚えながらも、最後には、そのようなインディアンに距離を置いてエッセイを終えているからである。

……種族の物語を語っているこの老人たちこそわたしの父祖であったのだ。……今わたしは、焚き火の明かりがようやく届くところに立ち、彼らに否定もされなければ、受け入れられることもない。年老いた赤色インディアンの父よ、わたしは自分の道を進んでいく。太鼓の周りに集まることはもはや今のわたしにはできない。²⁵⁾

相手を犯したり、逆に相手に犯されたりといった姿勢ではなく、まさに「共にいるけれども、それぞれが自由を守って生きる」という姿勢こそがロレンスの求めたものであった。こうしてロレンスは結局ヨーロッパへと回帰していくのであるが、その根拠となるエッセイがある。

How could I say: I am through with America? America is a great continent; it won't suddenly cease to be. Some part of me will always be conscious of America. But probably some part greater still in me will always be conscious of Europe, since I am a European.²⁶⁾

では具体的な回帰先がどこかと言えば、小説の世界から言えば『チャタレイ夫人の恋人』に描かれるシャーウッドの森であり、また処女作『白孔雀』で物語の主人公となるネザミアの森である。²⁷⁾

しかし、四十五歳という若い寿命が尽きる直前のロレンスが安住の地として夢見たのはイタリアにあったと言える。イタリアに関するエッセイ、特に『エトルリアの故知』というエッセイを読めば、いかにロレンスがこの地に、殊にエトルリア人の生き方にあこがれていたかがよく分かる。

There is a queer stillness and a curious peaceful repose about the Etruscan places I have been to, quite different from the weirdness of Celtic places, the slightly repellent feeling of Rome and the old Campagna, and the rather horrible feeling of the great pyramid places in Mexico, Teothithuacan and Cholula, and Mitla in the south; or the amiably idolatrous Buddha places in Ceylon. There is a stillness and a softness in these great grassy mounds with their ancient stone girdles, and down the central walk there lingers still a kind of loneliness and happiness. True, it was a still and sunny afternoon in April, and larks rose from the soft grass of the tombs. But there was a stillness and a soothingness in all the air, in that sunken place, and a feeling that it was good for one's soul to be there. (Underlined mine)²⁸⁾

就中、特に最後の「そこに居合わせるということは自分の魂にとってすばらしいことであるという感じ」の中で「魂」という単語に注意を向けたい。同じエッセイの中で、「魂」について明確にロレンスは「あらゆる生き物、木々あるいは水たまりであっても、火の性質と水の性質という二つの要素が釣り合い、もしくは均衡を知覚する例の神秘的な意識の接点を持っている。それが魂であり、宝の中の宝と言われるものである」と「魂」を捉えている。この魂は、また有名なハーディ研究では、「聖霊」と表現されるもののことである。「今人間に残された課題は、法と愛という二大原理を世々代々生かしめるもの、つまりその創造者であり、調停者である聖霊を認識し、探求することである」²⁹⁾と。

※

以上で“spirit of place” “sense of place” をキーワードにしなが、ロレンスが人間の心、より正確には「魂」をどのように捉えていたかを見えてきた。そこで今一度 Evernden の論文に戻って、現代科学の世界では

どのような成果が見られるのかを、特に生命誌研究に常に刺激的な視点を提供している中村桂子氏の著書を中心に概観し、結論を導きたい。

本論の最初のところで見たように、いわゆるデカルト以来伝統的に捉えられてきた、西洋的な「自己」が今日では最早「存在しない」ということは明白である。しかし、全く「自己」を否定しているかというところではなかった。「文脈の中の個」(‘an individual-in-context’)「場所の中の個」(‘self-in-place’)という位相から見る限り、「個」は確かに存在するのである。このような *Evernden* の考え方は恐らく、西洋ではまだまだ認められていないようだが、日本の分子生物学の先端で活躍している中村桂子氏の研究成果から見ると、その説が正確であることがよく分かるのである。

……分子生物学という分野を勉強し、DNA という興味深い物質を基本に解き明かされる生命現象の面白さに惹かれながら仕事をしているうちに、自分の中で自ずと「生命誌」という新しい考え方が生まれてきた。……DNA 研究を中心とした生命現象の「科学的説明」である。誰もが納得のできる事実を基礎にして新しいことが次々とわかってくる面白さは抜群だ。……しかし一方、心の底には、もう少し青臭い関心もうごめいていた。「生きているとはどういうことか」「人間とは何か」「私って何だろう」……と。……遺伝子は、全生物の共通性を強調するが、ゲノムになると DNA という同じ物質を使いながらヒトとはヒト、イヌはイヌと多様性を示す。それだけではない、私とあなたの違い、つまり個にもつながるのだ。……前者の研究が現存の生物の構造と機能を解明するのに対して、後者は現在に至る経過を示す。ゲノムは歴史的な存在なのである。私のゲノムは、両親から受け継いだものであり、さらに遡っていけば、人類の起源にたどりつく。それを遡れば、生命の起源にまで到達するのだ。³⁰⁾

DNA がいわゆる生物の構造や機能といった科学的な説明に使われる専門用語であるに対して、ゲノムは生命の現れの「多様性」つまりそれぞれ

の種に固有の歴史を表現している（一般には「全遺伝情報」と言われている）、という点がポイントである。そしてさらに氏は、生命の見方として一つの生物が持っている DNA のすべて（ゲノム）を調べるという完成間近な「ヒトゲノム解析計画」に賛成を表明しながらも、それに飽き足りないものを感じたと言っている。つまり科学的には「生命」を解析できても、なぜ「ヒト」「イヌ」といった全く違った生命体が存在するのか。その点が解明できない限り、先の計画は実に危ういものであると警鐘を鳴らしているのである。

それにしても遺伝子 DNA という一点では生命はすべて繋がっているのに、なぜヒトはヒト、イヌはイヌという多様性が生まれてくるのか。結局ゲノムとは歴史的存在なのである。「ゲノムは歴史的存在なのである。私のゲノムは、両親から受け継いだものであり、さらに遡っていけば、人類の起源にたどりつく。それを遡れば、生命の起源にまで到達するのだ」という結論に氏は行き着かざるを得ないと言っている。ここで大切なのは「歴史的存在」としての生命の捉え方にある。ロレンスが結局のところ、ヨーロッパに帰還していったのも、自らの生命のが背負っている「歴史性」に気づいていたからではあるまいか。しかしだからといって、「歴史」に縛られ不自由な生き方を強いられたのではない。「ヤマアラシの死を巡って」というエッセイには、歴史性と自由性を併せ持つことがどのようなことであるのかについて、実に印象的な記述がされている。ロレンスより遡ること一世紀前のロマン主義の時代の考え方を明確に批判しながら、新しい時代の作家らしい新たな見方を提示している。

One understands Wordsworth and the primrose and the yokel. The yokel had no relation at all or next to none with the primrose. Wordsworth gathered it into his own bosom and made it part of his own nature. I, William, am also a yellow primrose blossoming on a bank. This, we must assert, is an impertinence on William's part. He ousts the primrose from its own individuality. He doesn't allow it to call its soul its own. It must be identical

with his soul. Because, of course, by begging the question, there is but One Soul in the universe. This is bunk. A primrose has its own peculiar primrose identity, and all oversouling in the world won't melt it into a Williamish oneness. . . . It has its own individuality, which it opens with lovely naivete to sky and wind and William and yokel, bee and beetle alike. It is itself. But its very floweriness is a kind of communion with all things : love unision. (Underlined mine)³¹⁾

ワーズワスの根本的な間違いは「桜草を胸に抱き、自分の本性の一部にしてしまった」ことにある。しかし、先ほどの中村氏の説から言えば、桜草には「それ特有の桜草としての本性」があるはずである。「桜草には、それ独自の個性があり、まさに可愛いく純真に、空や、風や、ウィリアムや、田舎者や、ハチや甲虫に向かってすら、その個性を開示するのである。」桜草の「魂」とワーズワスの「魂」が一体でなければならないという謂われは絶対あり得ないのだ。これこそまさに「桜草ゲノム」と言い換えることが出来る。「ゲノム」という言葉こそ使っていないが、ロレンスには今日の最先端の科学的成果にも匹敵する内容が、まさに詩人の直感に近い形で見えていたという気がしてならないのである。

このようにロレンスには「プリムローズゲノム」「ヒトゲノム」「トリゲノム」などが見えていたので、そのようなロレンスにとって、ある特定の「土地」にも一種のゲノム的な命を見出したとしても決して不思議なことでも何でもあるまい。丹下健三が、巖島神社という地形とその信仰に密接な繋がりを感じ取って、広島ピースセンターの設計をしたように、ロレンスにもそういった歴史性に対する深い洞察力が具わっていたと思われるのである。ロレンス晩年の1927年に書かれた「花咲くトスカーナ」という実に美しいエッセイがある。このエッセイは、地中海地方の人々が、みずからの住まう土地の靈に忠実に生き、永年にわたって積み上げてきた「歴史性」に対して万感の敬意を込めてロレンスが賛美したすばらしい文章で

ある。

Each country has its own flowers, that shine out specially there. In England it is daisies and buttercups, hawthorn and cowslips. In America, it is goldenrod, stargrass, June daisies, Mayapple and asters, that we call Michaelmas daisies. . . .

But by the Mediterranean, now as in the days of the Argosy, and, we hope, for ever, it is narcissus and anemone, asphodel and myrtle. . . .

It is queer that a country so perfectly cultivated as Tuscany, where half the produce of five acres of land will have to support ten human mouths, still has so much room for the wild flowers and nightingale. When little hills heave themselves suddenly up, and shake themselves free of neighbors, man has to build his garden and his vineyard, and sculpt his landscape. . . . For centuries upon centuries man has been patiently modeling the surface of the Mediterranean countries, gently rounding the hills, and graduating the big slopes and little slopes into the almost invisible level of terraces. Thousands of square miles of Italy have been lifted in human hands, piled and laid back in tiny little flats, held up by the drystone walls, whose stones came from the lifted earth. It is a work of many, many centuries. It is the gentle sculpture of all the landscape. And it is the achieving of the peculiar Italian beauty which is so exquisitely natural, because man, feeling his way sensitively to the fruitfulness of the earth, has molded the earth to his necessity without violating it.³²⁾

ここで大切なのは、歴史的な生命の捉え方である。イタリアに惹かれ、結局ロレンスがヨーロッパに帰っていったのも、自らの生命が背負っている歴史性に気づいていたからである。しかしだからといって、歴史に縛ら

れがなじがらめになって不自由な生き方を強いられていたのではない。それどころか「桜草の「魂」とワーズワスの「魂」が一体でなければならない」という謂われは絶対あり得ない」という点を先に見たように、歴史性と自由性を同時に生きることが本当に命を生かすことになるのをロレンスは知っていたのである。科学の世界では実証的に説明できる範囲は限られている。しかし詩人であったロレンスは、まさに直感的に生命の実態を実に的確に捉えることが出来たのである。

※※※※※※※※※※

以上のことを踏まえて、結論めいたものにすれば以下のようになる。人間とは、単なる土地の物理的形狀から由来する可能性だけでなく、まず何よりも「地の霊」つまりその土地の持つ文化的・歴史的・社会的な環境・背景を読み解く要素を持った「地霊」のまっただ中にいわば無意識のうちに生を受け、育てられ、やがて自分の居場所、つまり環境と自我との深い結びつきを表象する「土地の感覚」を育み、自分とは何かということを徐々に学んでいく存在なのである。そうして「土地との霊」、つまり自らのおかれた場所の歴史・文化などに意識的に目を向けていく存在なのである。このように「土地の感覚」と「土地との霊」とが幸福にも一体化した土地が先ほど引用した「花咲くトスカーナ」であったのだ。‘Now, back in Europe, I feel a real relief . . . , or No, it’s a relief to be by the Mediterranean, . . . ’³³⁾とロレンスがしみじみと述懐するように、彼は漸く自らの「安住の地」を「地中海」に見出したのであった。「はじめに」で触れたように『リトル・トゥリー』の主人公が結局白人社会に馴染めずに、再びインディアンの世界に戻って行って初めて心の平安を得たように、ロレンスも世界中を放浪して漸く自らの魂の安住の地を、イギリスではなく、ヨーロッパ、それも地中海に見出したのであった。

注

- 1) 吉本隆明『心とは何か』(弓立社、2001)

- 2) フォレスト・カーター、和田穹男訳『リトル・トリー』（めるくまー、2001）、pp. 108-112.
- 3) 前掲書、p. 109.
- 4) Neil Evernden, "Beyond Ecology: Self, Place and the Pathetic Fallacy" *The Ecocriticism Reader* (Athens: The University of Georgia, 1996)
- 5) *Ibid.*, p. 93.
- 6) *Ibid.*, p. 97.
- 7) *Ibid.*, p. 98.
- 8) *Ibid.*, p. 99. いわゆるデカルトの二元論に対してエコクリティシズムが明確に反対の姿勢をとっている点や、エコクリティシズムが目指している立場については、つい最近出来た J. Moran: *Interdisciplinarity* でも次のように主張されている。…“The efforts of Descartes and other scientists and philosophers in the sixteenth and seventeenth centuries to separate out the body, which was seen as mechanically functioning like the rest of nature, from the autonomous human mind, was an extremely significant development in the understanding of nature. . . . This division was also important in separating the sciences from the humanities. *The former were given the task of bringing under control the neutral 'other' of nature, which included the human body; the latter were left with the apparently autonomous, human-made products of the mind and culture. Ecocriticism challenges these divisions between matter and mind, nature and culture, and between natural sciences (such as biology and geology) and humanities subjects (such as literary criticism, cultural studies and cultural history).* . . .” Joe Moran: *Interdisciplinarity* (London: Routledge, 2001), pp. 172-73. (Italicized mine)
- 9) ハロルド・フロム他、伊藤詔子他訳『緑の文学批評ムエコクリティシズム』（松柏社、1998）、pp. 11-12.
- 10) D. H. ロレンス『不死鳥 II』（山口書店、1992）、pp. 193-94.
- 11) 前掲書、p. 196.
- 12) 前掲書、p. 197.
- 13) D. H. ロレンス『不死鳥上』（山口書店、1984）、p. 131.
- 14) 前掲書、p. 136.
- 15) D. H. Lawrence, *The Symbolic Meaning* (Centaur Press, 1975), p. 21.
- 16) 『不死鳥上』、p. 136.

- 17) 前掲書、pp. 155-56.
- 18) 鈴木博之『日本のく地霊』（講談社現代新書、1999）、pp. 35-37.
- 19) 前掲書、p. 36/p. 41. 写真の出所と謝辞：広島ピースセンター配置図（図版）、厳島神社配置図（図版）（p. 38）及びHP シェル型慰霊碑の写真（スライド）（p. 37）については、『日本のく地霊』の著者鈴木博之氏のご厚意を得て利用させていただいた。この場を借りてお礼を述べたい。
- 20) Donald Gutierrez, *Breaking Through to the Other Side: Essays On Realization in Modern Literature* (New York: The Whiston Publishing Company, 1994), p. 24.
- 21) D. H. Lawrence, *Mornings in Mexico and Etruscan Places* (London: Heinemann, 1970), pp. 24-25.
- 22) *Ibid.*, p. 23.
- 23) D. H. Lawrence, *The Plumbed Serpent* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) p. 444.
- 24) *Mornings in Mexico*, pp. 45-46.
- 25) 『不死鳥上』、p. 148.
- 26) D. H. Lawrence, *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence 1936* (New York: The Viking Press, 1968), p. 117.
- 27) 井上義夫『薄明のロレンス：評伝 D. H. ロレンス I』（東京、小沢書店、1992）、p. 284.
- 28) *Mornings in Mexico and Etruscan Places* (London: Heinemann, 1970), p. 9.
- 29) D. H. ロレンス『不死鳥下』（山口書店、1986）、pp. 157-163.
- 30) 中村桂子対談集『ゲノムの見る夢』（東京、青土社、1996）、pp. 6-8.
- 31) D. H. Lawrence, *Phoenix II* (New York: The Viking Press, 1968), pp. 447-448.
- 32) D. H. Lawrence, *Phoenix* (New York: The Viking Press, 1968), pp. 45-46.
- 33) *Ibid.*, p. 118.